



Title	鳥取県と北米越境の表象一日系、ディアスボラ、還流の再考—
Author(s)	Ginnan, Alexander Koji
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101569">https://hdl.handle.net/11094/101569</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

様式3

論文内容の要旨

氏名 (GINNAN, ALEXANDER KOJI)	
論文題名	鳥取県と北米越境の表象 —日系、ディアスポラ、還流の再考—
論文内容の要旨	
<p>本研究では、世界の人口増加と日本の人口減少が同時に進んでいる時代に、視覚文化の分析を通して、日本の人口最少県である鳥取県と海外在留邦人が最も多く暮らす北米間の人の移動を中心に、人口統計や数値では把握することができない、ローカルなつながりについて検討する。鳥取県と北米間の人の移動は、19世紀後半から現在に至るまで続いている、必ずしも一方向の線形的な移住と定住の物語に結びつくわけではない。海外に渡っても、家族、親戚、友人などの関係で元の居住地との精神的および実践的なつながりを維持し、複数の地域にまたがって生きる人がいる。さらに、このような生き方は世代を越えて継承される場合もある。本研究で取り上げる視覚文化の事例は、このような複雑な現実の課題と展望に迫る。分析する作品は、ヘンリー木山義喬（1885-1951年）の『漫画四人書生』（1931年）および『連載漫画 ジョージ君 ベン君の祖國訪問』（年代不詳）、杵島隆（1920-2011年）の写真シリーズ「米子時代」（1945-1953年）、そしてシンディ望月（1976年-）のインスタレーション三部作《石・紙・鋏/Rock, Paper, Scissors》（2014-2017年）である。いずれのアーティストと作品は鳥取県および北米との強いつながりを持ち、移民研究の対象地域として注目されてこなかった鳥取県と移動という観点から日系、ディアスポラ、還流といった概念の再考を促す。一般的に日系人とは、主に海外で暮らす日本人の子孫を指し、日本国内で生活する日本人と区別されてきた。日系人を含むディアスポラは、祖国から離散した民族を意味する総称であり、還流はディアスポラが祖国に戻る場合に使用されている。いずれの概念も国内と国外との明確な区別を前提とするが、本研究で取り上げるアーティストの生き方および作品の題材と表現方法は、そのような境界に挑戦し、鳥取県と北米を架橋している。</p> <p>本研究の目的は、上述の鳥取県および北米にゆかりのあるアーティストの人生と作品を分析し考察することにより、これまで一般的に認識されてこなかった地域と人間の多様なつながりのあり方とそれに直結する日系、ディアスポラ、還流といった概念を巡る問題について理解を広めることである。この作業が世界の人口増加と日本の人口減少という二重の課題を巡る危機感から、ローカルなレベルで既に存在する多様なつながりの可視化と理解への移行を促すことが期待される。</p> <p>第1章では、鳥取県日野郡根雨村（現、日野町根雨）出身の画家・漫画家ヘンリー木山義喬が自らの在米体験を題材にした『四人書生』およびその後描きかけた未出版の『ジョージ君 ベン君の祖國訪問』を分析し、彼の移動の経験と創作活動がディアスポラと還流の概念に与える示唆について考察する。木山は、1904年、19歳の際に絵画研究を目的にカリフォルニア州サンフランシスコ市に渡り、約18年間アメリカで生活した後、1922年に帰国した。日本で結婚と離婚した後、1924年から再びアメリカで約2年半暮らし、1927年に日本に戻った。その後、1931年に『四人書生』を出版した後、再度アメリカに渡り、6年後の1937年に帰国した。第二次世界大戦が迫るにつれて、海外渡航が難しくなり、木山は人生の最後の14年間を日野町で過ごし、創作を続けた。その間に描き始めたのが『ジョージ君 ベン君の祖國訪問』である。木山は鳥取県で生まれ鳥取県で亡くなったが、人生の半分は日米往還を繰り返し、漫画家として技術と題材は主にアメリカで獲得している。彼の漫画は日本語と英語の両言語を交えており、両国の知識がなければ不可解であり、簡単に「日本の漫画」か「アメリカン・コミックス」のいずれかに分類することはできない。『四人書生』には、当時のアメリカにおけるディアスポラの内実が描かれており、『ジョージ君 ベン君の祖國訪問』は二世の還流を題材にしている。いずれの作品にその時代背景が強く反映されているが、同時に現代の視点から地域と人間の関係を再考する上で多くの洞察が含まれている。</p> <p>第2章では、写真家の杵島隆が日本の連合国占領期（1945-1952年）に鳥取県西伯郡大篠津村（現、米子市大篠津町）で撮影した「米子時代」シリーズを中心に、彼の家族および自身の移動の経験がローカルな視座にもたらす可能性について考察する。杵島は、1920年にアメリカ・カリフォルニア州で鳥取県出身の両親のもとで生まれたが、アジア人移民に対する白人社会の反感が増すにつれて4歳の際に母の実家（大篠津村）に移住した。彼は、アメリカ国籍のみに</p>	

登録されていたため、「アメリカ人」として鳥取県で育ち「日本人コンプレックス」を抱くようになった。戦時中、アメリカ在住の父は強制収容所に入れられ、兄はメリーランド州の海軍兵学校で勤めることになった。一方、日本で暮らす杵島は悩んだ末、特攻隊に入隊したものの、出撃する前に終戦を迎えた。「米子時代」シリーズには、占領軍に接収された基地やアメリカ兵の写真が多数含まれている。同時期に東京や横浜で同様な題材を写した写真家は多いが、杵島のまなざしは二世代に渡る家族の日米間の移動に強く影響されており、彼の作品には日本およびアメリカの代表的な占領期写真とは著しく異なる要素が見られる。杵島は、第二次世界大戦といった特殊な時代を生きた人物であるが、現代においてこそ彼のように生まれた国と暮らす国および暮らす国と保持する国籍の間に差異があり、家族が複数の国に点在し、それが故にアイデンティティと帰属意識を巡る葛藤に悩む人は少なくない。越境的なつながりを前提としたローカルな視座は、このような移動にともなう問題とその対応も視野に入れなければならない。

第3章では、インター・ディ・シ・プリナリー・アーティスト、シンディ望月のインスタレーション三部作《石・紙・鉄》を分析の対象とする。本作品は、19世紀末から20世紀初期にかけて鳥取県西部の境港市と米子市からカナダ西海岸のブリティッシュコロンビア州に渡った日本人移民の歴史および、かつて米子市の萱島にあった料亭を題材にした歴史改編サイエンス・フィクション物語である。望月は、3年間鳥取県とブリティッシュコロンビア州を往還しながら《石・紙・鉄》を制作し、インスタレーションを両地域において展示した。父方の先祖は福岡県と静岡県に由来し、母は横浜出身であるため、彼女は鳥取県に出自を持つわけではない。しかし、《石・紙・鉄》は米子市でのアーティスト・イン・レジデンス事業の一環で制作され、多くの県民が制作過程に協力している。望月の父方の曾祖父母は1900年にカナダに渡り、母は戦後に日本からカナダに移住した。つまり、彼女は三世の父と「新一世」の母の間で生まれており、父方の系譜においては「四世」であると同時に、母方の系譜では「二世」である。このように、望月は日本とは重層的な関係を持ち、彼女の実践はひとりの人間が複数の地域と実質的なつながりを紡げることを実証する。

終章では、本研究の核となる第1章から第3章の事例をさらに相対化するために、面高直子のノンフィクション小説『ヨシアキは戦争で生まれ戦争で死んだ』（2007年）の題材となっている後田義明（1947-1969年、1958年以降はSteve Yoshiaki Flaherty）の人生と移動の経験、それから鳥取県とのつながりについて検討する。義明は、占領期に母の後田次恵がアメリカ兵にレイプされた結果生まれた。次恵は貧困に苦しみ一人で息子を育てることが出来なかつたため、やむを得ず、当時多くの混血孤児を受け入れていた神奈川県大磯町の児童養護施設エリザベス・サンダース・ホームに4歳の義明を預けることにした。エリザベス・サンダース・ホームは、1948年に鳥取県岩美町出身の外交官澤田廉三（1888-1970年）の妻、澤田美喜（1901-1980年）によって設立された。美喜は、毎年夏休みにホームの子供を岩美町の海岸にある澤田家の別荘に連れて行き、共に過ごしていた。1958年に、11歳の義明はアメリカ・サウスカロライナ州に養子として渡ることになり、その日から名前はスティーブ・フラハティになった。最終的にスティーブはアメリカ兵としてベトナム戦争で戦死するが、彼が亡くなる直前まで鳥取県での夏の記憶を大切にしていた証拠が残っている。鳥取県での夏の経験を大切に思っていたのは義明／スティーブだけでなく、1950年代から1970年代の間にエリザベス・サンダース・ホームで育った多くの卒業生である。したがって、終章ではホームの卒業生の視点から鳥取のような地域に見出せるつながりについて考察する。

本研究の問題意識は、私自身の鳥取県と北米間のつながりに起因する。私は1970年代の終わりに日本からカナダに移住した両親のもとで1983年にオンタリオ州で生まれた。対照的に兄は日本で生まれ、幼い頃に両親と共にカナダに移住したため、移民の「世代」の概念に従えば彼は「一世」である。しかし、兄もカナダで育っており、異なる国での出生時の手続き以外は兄弟の「世代」の線引きが難しい。一方、父は東京で生まれ育ち、母は宮城県出身者であり、両親の海外移住を基準にすれば私は「二世」となる。しかし、これは国家を基準とした「世代」の捉え方に過ぎない。例えば、本研究の対象となる鳥取県のような地域を基準にした場合、私の「世代」の位置づけが変わってくる。実際、父方の曾祖父は鳥取県出身者であり、彼が世紀の変わり目に北海道に移住した時点から私の移民としての「世代」を考えることができる。北海道では、私の祖父が生まれたが、彼はそこに定着せず東京に移住し、東京で生まれた父はさらにカナダに移住した。そして、カナダで生まれた私は逆に鳥取県で暮らしている。日本からの移動を基準にして考えれば、私はカナダに移住した日本人移民の「二世」であるが、鳥取県からの移動を基準にして考えた場合、私は北海道に移住した鳥取県民の「四世」であり、四世代ぶりに還流していることになる。

本研究で取り上げたアーティストと作品は、日系、ディアスボラ、還流の再考を促し、移住は必ずしも一回限りで一方の線形的な移動ではない、移動の影響は世代を越えて継承される場合がある、そして歴史とアイデンティティは重層的に存在することを訴え、地域と人間の関係についてこれまでの一般認識と異なる理解を求めている。鳥取県と北米間で既に存在する多様なつながりを可視化し、それについての認識を広めることで、新しいローカルな視座の構築が可能になる。その一環で、今後も人の移動にともなって複雑化する地域と人間の関係を題材にした新しい視覚文化に注目し続けることが不可欠である。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( GINNAN, ALEXANDER KOJI )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主査 大阪大学 准教授 中嶋 泉 副査 大阪大学 教授 宇野田尚哉 副査 大阪大学 教授 池上裕子 副査 大阪大学 名誉教授 北原 恵
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

## 様式 7 別紙

### 論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：鳥取県と北米越境の表象 一日系、ディアスボラ、還流の再考—

学位申請者 GINNAN, ALEXANDER KOJI

#### 論文審査担当者

主査 大阪大学准教授 中嶋 泉  
副査 大阪大学教授 宇野田尚哉  
副査 大阪大学教授 池上裕子  
副査 大阪大学教授名誉教授 北原 恵

#### 【論文内容の要旨】

本研究は、日本の人口最少県である鳥取県と、海外在留邦人が最も多く暮らす北米の間の「越境」によって生み出された視覚文化作品を分析し、移動する人々が持ちうる視座のありようを明らかにするものである。研究対象として、鳥取県日野郡に1885年に生まれ、20世紀初頭の日米を行き來したヘンリー木山義喬、1920年代のカリフォルニアで鳥取県出身の両親のもとに生まれ、戦後、米子市の連合国軍占領期を撮影した写真家の杵島隆、そして、境港市からブリティッシュコロンビア州に渡った日本人移民を題材に作品を制作したシンディ望月が取り上げられた。全体は3章からなる本論部に序章と終章を加えた構成で、全体の分量はA4の判型で117頁、56点の図版が加えられている。

序章では、従来の移民研究における概念の批判的再考と、鳥取と北米間の移住者による美術の歴史的記述が試みられ、移動にかかわる表現、越境の表象という主題に接近するための論点が整理されている。日本からの移民の研究は、定住志向の「日系人」や祖国から離散した「ディアスボラ」といった一方向的な移住の様態を対象にすることが多かった。しかし本章は、祖国に戻る、あるいは地域間を往還する人々の存在を強調し、「環流」という概念に注目して、本論が扱う20世紀初頭に国境を越えた漫画家、大戦間に移動を余儀なくされた写真家、グローバル化社会のなかで移動を繰り返す現代アーティストによる「越境の表象」に、従来の研究では見落とされてきたローカルな視座やつながりがあると見通しを立てた。

序章の後半では、伊谷賢蔵、綿貫恵史、小早川秋聲ら、戦争を通じて移動を繰り返した、鳥取に所縁のある美術家を中心に「移動」という観点に基づいた地域視覚文化史の記述がなされた。移動によって変化する表現に着目することで、地方の美術を類型として捉えがちな美術史や、局地的活動を対象とする郷土史の方法に対して、変化に富み、動的な近代鳥取の視覚文化史を明らかにすることに成功している。これは基礎研究としてこの論文が成し遂げた成果の一つである。

第1章から3章は、鳥取県出身、あるいは鳥取県を活動の場とした三人のアーティストの個別研究である。第1章では、ヘンリー木山義喬が自伝的渡米体験を題材に創作した『漫画四人書生』(1931年)の再解釈が行われた。本作は移民による自己表象資料として英語圏の移民研究では部分的な注目を集めてきたが、本論は、この漫画作

品の特質である日本語と拙い英語の混ざり合う会話、多様なアジア人表象、同国人どうしの軋轢などに目を向けることによって、移民の戸惑いや自己認識の矛盾が表されていると分析した。また、本研究の調査で発見された未刊の原稿『ジョージ君 ベン君の祖國訪問』(年代不詳)について、戦後の日本に移動した移民二世が「ローカル」を再発見する様子が描き込まれていることが指摘され、「環流」経験表象の重要な例であることが示された。

第二章は、米国生まれの杵島隆が、戦中から移住した鳥取県米子市で、占領期の町を撮影した写真シリーズが取り上げられた。同時代に数多く出版された占領風景写真と比較しながら、米国人や日本人の男女の視線が入り混じる杵島の写真を、本章は、移動による喪失の経験や移民のメランコリーを背景とした、アイデンティティの葛藤の表現であると論じた。また、日本の写真批評が杵島の両面的側面に目配りをせず彼を日本写真史に組み込むことの問題が指摘され、作者の移動が創作に与える影響の重要性が強調された。

第三章では、日系カナダ人であるシンディ望月が、米子とブリティッシュコロンビア双方で調査、制作、発表を行なったインスタレーション三部作《石・紙・鉄／Rock, Paper, Scissors》を取り上げた。同作は19世紀末から20世紀初期にかけて、鳥取県西部の境港市と米子市からカナダ西海岸のブリティッシュコロンビア州に渡った日本人移民の歴史に関する調査に基づいて制作されている。本章は、本作品の制作過程と鑑賞の詳細な記述と分析から、このインスタレーション作品が移民史を新たに再編しうる時間と空間を生み出していること、また、多地域で活動する今日の移民アーティストがローカルとグローバルを媒介する存在であることを結論として示した。

終章では、筆者自身の立場、すなわち鳥取を含む日本各地とカナダのあいだで、多世代にわたり行き来を繰り返す移民の立場から「日系」、「環流」、「ディアスボラ」という概念がオートエスノグラフィー的に再検証されている。ここで発される「私は「日系人」なのか」という問いは、移動のはざまにある人生を理解する方法への切実な要請につながっており、本論文に通底する問題意識と本研究の意義をより私的な視点から照らし出した。

### 【論文審査の結果の要旨】

本論文の最大の特徴は、移民研究、美術史研究の方法を批判的に継承しつつ、往還のある「移動」を重要概念として作品分析をすることによって、個別多様な移動の経験を理解する視座を提示したところにある。

美術家の移動と越境については主に作家論を中心とした研究があるが、本論文では、三人のアーティストを取り上げることによって移動から生み出される作品群の分析に重点が置かれ、鳥取という地を軸に展開した移動の表現が重層的移民表象として描き出された。本論が、いわゆる伝統的美術作品ではなく、漫画、写真、インスタレーションなど、柔軟な解釈を求める非伝統的な視覚文化作品に目を向けたことの成果は大きく、独創的な着眼点と思い切った考察によって、異国の地で「他者」になる経験が一通りでないことや、複数の土地の往来で感じるアンビバレンツな自己など、完結することのない移民経験に目を向けることが可能になっている。さらに、この研究が鳥取にゆかりのある創作を基盤においていたことにより、移民研究としてはマイナーな地域でこそ明らかにされる移民、移動の個別性が引き立てられた。三人の作家の研究は今後「移動」という観点から深められるだろう。

他方で、本論に不足が全くなかったわけではない。本論文が重要な鍵概念としていた「ローカル」の定義は十分に行われておらず、この概念がグローバルに対して持つインパクトが結論にうまく結びついていない。また、鳥取をベースとした人々の移動を考察する際、北米だけでなく、同地に隣接するアジアの国々との交流についても記述する余地があったはずであり、鳥取へ／からの移動の研究はより広範囲に行われる必要がある。

以上のような問題はあったが、それらは、本論文の分野横断的な試みや、移動という視座から引き出された新たな知見や解釈を数多く示した本論の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文を博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと認定する。